

十字路

ピーチ

序章

気がつけばもう、20年の歳月が経っていた。

理沙、専業主婦、40歳手前。

旦那と二人の子供とあわただしくも、平和な毎日を過ごしていた。

上の娘は8歳、小学校3年生で生意気盛りだ。いっちょ前に理沙のファッションチェックなんかをしてくる。

息子は6歳。小学校に入学したてで、今は毎日野球に夢中で朝から晩まで外でボールを追いかけている。

旦那は子煩悩でまじめで、理沙の両親も大事にしてくれて、少し酒癖が悪いのが玉に瑕だが、周囲からは、いつも「羨ましいくらい仲が良い家族」と言われ、理沙も手前味噌ながらこれには賛成だった。

そんな平和なはずの一家に、というよりは理沙に変化が起きたのは、梅雨が明けるか明けないか、という微妙な天気のある日だった。

息子が少年野球教室に入りたいとせがむので、仲良しのお友達を2人連れて、理沙の友人の息子も通っているという野球教室に体験入学に行くことにしたのだ。雨の中3人の小学生を連れて教室に向かうのは正直気が引けたのだが、息子があまりにも楽しみにしていたので、がっかりさせるようなことなどできるはずもなく、汚れてもいいデニムに、着古したパーカーに帽子を目深にかぶって、コーヒーを一気飲みして気合いを入れ玄関を出た。

外に出た瞬間、じめっとした空気がまとわりつき、止む様相のない雨が容赦なくアスファルトを敲きつけていた。

息子とその友達は、理沙の前をスキップしながら野球教室への道中さえも、楽しんでいるようだった。

「車に気をつけるのよ～！！」と後ろから叫びながら、あじさいが満開の公園を左に見つつ、歩を早めた。

理沙は野球が嫌いだった。

いや、正確には野球が「嫌いになった」のだ。

だから、息子が突然幼稚園の年中さんの頃、父親と一緒にナイター中継を見ながら「僕プロ野球選手になる！」と言った時、思わず「ええ〜?!」と、叫んでしまったくらいだ。

旦那が「なれるかどうかもわからないのに、叫ぶことはないだろう」と笑いながら言っていたのを尻目に、とても動揺したことを覚えている。

しかし、そんな母親の気持ちなど息子が知る由もなく、日に日に息子は野球にのめり込むようになった。そして迎えた今日。

息子の将来の夢を否定する母親なんて、どこにいるんだろうか？と自己嫌悪に陥りながらも、どうしても気が進まない。

「もう20年も前の話なのに」と頭ではわかっているのに、とかく野球のことになると、未だに理沙の胸は少し、痛むのだった。

「ママー、着いたよ！ここだよ！！」
息子の声で我に返り、傘を畳んで小さな体育館の珊の下に入った。

少し寒そうに折りたたみのイスに座りながら受付をしている女性に、「すみません、体験入学の申し込みをしている小森ですけど」と話しかけるとパッと顔をあげて笑顔で迎えてくれた。失礼だが、こんな体育館ではなく、スーツが似合いそうなキャリアウーマンに見えた。

少し取り澄ました笑顔で、「どうぞ、こちらへ。まだ始っていないのでどうぞ中に入って準備運動から一緒に体験してみてください
生憎の雨なんで、今日は室内練習だけなんですけど、楽しんでいってくださいね」

息子たちは、とるものもとらず体育館の中に駆け込んでいった。その瞬間だった。

受付の女性が「監督、体験の方ですよー！」と呼びかけてその男性が入口の方に振り向いたとき、理沙の心臓は止まった。

顔に皺も出来ていたし、髪にもいくらか白髪が交じっていたが、疑いようもなく、目の前にいるのは理沙がかつて散々振り回されたあの男だった。相手はまだ気がついていないようだったので、引き返すなら今だ。

受付をしてくれた女性に「またあとでお迎えにきても大丈夫ですか？」と尋ねると申し訳なさそうな顔で「体験入学の場合、小学校低学年の方は保護者の方同伴でお願いをしているんです」と言われ、私は仕方がなく体育館の中に再び戻った。

もはや息子たちのことなど目に入らず、私の目はあの男を追っていた。笑い声も、話し方も、走り方も、何もかもあの頃と同じだった。

再会するときは、最上級に幸せそうな自分を見せつけると決めていたのに、今の私はみすぼらしい格好に、化粧さえほとんどしていない。顔を合わせたくないときほど、こういうことが起きてしまうのだろうか、、、

息子には申し訳なかったが、この教室に通わせるわけにはいかなかった。そんなことを考えていると休憩時間になり、冷えたパイプ椅子に腰をかけなおしたとき、肩を叩かれた。振り向くのが怖かったが、「久しぶり」とあの声で話しかけられやむを得ず顔を合わせた。

「すごい偶然だな。俺がいるって知ってて体験に来た？」
「うぬぼれないで。知ってたら絶対に連れてこなかった」動揺を察知されたくなくて、いつも以上にキツイ返事をしてしまった。
「久しぶりなのにきついなー。息子さん、まだ少ししか見てないけど素質ありそうやし、本人もやる気があるなら早いうちにちゃんと基礎を習ったほうがいい。まあ、どこの教室に行かすかはお前に任せるけど」

と相変わらず少し偉そうに、自信たっぷりに言った。

「まあ、またあとで」と一言言い残し、あの男はまた子供たちの輪に戻って行った。

不思議な感覚だった。

あの男とのことはもう遠い昔の出来事だったのに、つい最近のことのような気さえした。死ぬほど憎んでいたはずなのに、あの男に自分の息子のことを褒められると、なんだかわからないけど嬉しいような、むず痒い気持ちになった。気がついたらひとりで悶々としていると、背後から視線を感じた。

何気なく振り返ると、受付をしてくれた女性が立っていた。心なしか、先ほどより顔がひきつっている気がした。

「うちの主人とはもともとお知り合いなんですか？」
丁寧な言葉だったが、どこか棘がある気がした。

「ええ、もう遠い昔のことなんですけどね」
何事もない、遠い過去のことかのように応える。

その瞬間、体育館から見える雨が急に勢いを増した気がした。

「あ———また雨だ———」

旦那が朝ベッドから起きるなり、窓の外を見ながら叫んだ。

昨日の天気予報を見た時からわかっている癖に、

朝起きては一番にそれを確かめ、天気予報を見た時より、さらに悔しがる。

梅雨の時期は毎年憂鬱だ。

旦那は、仕事よりも大事にしている野球教室が外で出来ないと嘆くし、洗濯物も一向に乾かない

。

野球のユニホームは無駄に分厚く、乾かすのも一苦勞であることを旦那はわかっているのだろうか。

ふとテレビに目を移すと、高層オフィスビルでデザイナーもののスーツを身にまとい快活と仕事をする「働く女性たち」の特集をやっていた。

なんだか不愉快になり、チャンネルを変えた。

3流芸能人同士の熱愛について、レポーターが熱心に話していた。

あのスクリーンの中でうつっていた女たちは、かつての私だった。

朝から晩まで働き続け、好きな時に好きなものを買って、食べ、飲み、旅行にだって行けた。

それなのに、今の私ときたら、、、

人様には到底話せない紆余曲折の末に、

一番好きだった人と結婚したはずなのに、現実には、やはり甘くはない。

「今の生活に満足しているか？」と聞かれたら、決して頷くことは出来ないだろう。

かつての同僚たちは順調に出世を重ね、

時たま私の住む地方都市に出張で来ると、ご飯を食べに行く。

大好きな仲間との再会は何よりの楽しみだが、

ある意味、自分の現実を思い知る、とても辛い場でもある。

ふと、そんなことを考えながらボーっとしていると、

「じゃあ今日も夕方、頼むわ〜！」と玄関口で旦那が叫び、

あわてて娘を抱えて見送りに行く。

「いってらっしゃい。気をつけてね。」

結婚して以来、どんなに喧嘩をしてもこの挨拶だけは欠かしたことがない。
やはりどんなに腹が立っていても、相手が無事に家に帰ってくることを望んでいるのだな、と
思う。

そして、これが私が望んだ幸せの形なのだ。

改めて自分に言い聞かせて、いつ乾くともしれない洗濯物を干すために、風呂場に向かった。
最近、かまってほしくて仕方がない病の娘の、「ママーー」とわめき叫ぶ声が雨音をかき消す
。

ふと窓の外を見ると、雨雲の中から一筋の光が射し、
少し気分が晴れた。

「恵菜ちゃん、ちょっと待っててねー」

そう答えながら、私は日常にまた戻っていった。

「これでいいんだよね？」と誰に聞くともなく窓の外を見上げると
そんな私に優しく話しかけてくれているかのように、雨雲の間から光が射し始めたような気が
した。

「ママ！！マーマ！！体操着取ってってば！！！！人の話聞ってるの?!」

娘に、今日3度目位のお叱りを受ける。

「ごめんね。はい、体操着。」と走って玄関で手渡すと、娘が

「もー、最近これなんだから。困っちゃう」とお礼もそこそこに、そのままドアを飛び出し

「行ってきまーす！」と叫びながらあっという間に、姿が見えなくなっていた。

あの日以来、心とした瞬間に、急に意識がどこかにいってしまい、ボーっとすることが多くなった。

「気にしないでおこう」と思えば思うほどに、、、

久しぶりにランチをした大学時代の友人の美幸にも

「理沙、人の話聞ってるの？なんかあった？」と呆れられる始末だ。

せっかく、久しぶりに高級ホテルでの豪華ランチだったのに、ほとんど上の空だった。

可愛い顔をして、相変わらず毒舌の美幸の話に

顔では笑いながらも、心がどこか曇っていた。

「いまさらなんで、、、」

だいたいの出来事は、いつかは笑い話になるはずなのに、

あの男との記憶だけは、どうしても笑って話すことが出来なかった。

あの男との過去を知っている美幸に、話そうとも思ったが、

自分でも消化出来ていない話をどうやって人に話せばいいのだろうか？

結局、次は私の家で飲む約束をして、その日は帰宅した。

別れたあとに「何があったかわからないけど、次はワイン持って皆で突撃するから、なんでも話してね」とメールが届いた。

帰宅して早々に息子が母の日にくれたエプロンをつけ、炊飯器のスイッチをいれた。

いつものように、夕飯の支度にとりかかろうとした

まさにその時、電話が鳴った。

最近しつこくなっているセールスの電話を警戒しながら、
「もしもし」と受話器をとった向こう側から聞こえてきたのは

「先日は体験入学していただき、誠にありがとうございました。
よろしければ、来週末の土曜日に練習試合があるので、もう一度見に来ませんか？」と
抑揚もなく話す、あの男の奥さんの声だった。

「や、うちは興味がないので結構です」
セールスの電話を断るかのように、何の感情も込めずに返事した。

すると、「そうですか、、、残念ですが、また何かありましたらご連絡させていただきますね。
夜分に失礼しました。」
先ほどより1オクターブくらい高い、嬉しそうな声で言われ、電話が切れた。

まあ、そういうことか。
きっとあの奥さんは、私とあの男のことを知っているに違いない。
でもだからといって、いまさらなんだというのだろう。

「あの男と一緒になれたのは、貴女なのに、、、」

心の中でそう呟きながら、旦那を駅まで迎えに行った。
車に乗り込むなり、「今日の御飯はなにかな～楽しみだな～」
と決まって毎日嬉しそうに言う旦那の横顔を見ながら

自分の今の生活に、家族に、人生に、、、何一つ不満はないはずなのに、、、

ずっと心の中で蓋をしていたあの感情が、
再び溢れだしそうになっていることに、
必死で気がつかないふりをして、車のキーを力強く回した。

気がつくのと、西の空に晴れ間が見え、
私が一番嫌いな季節、「夏」の到来が近いことを告げる雲の流れを
横目で見ながら、家路を急いだ。

朝起きて、洗濯機をかけたら朝食のお味噌汁の準備にとりかかる。

大根と油揚げのお味噌汁が旦那の一番のお気に入りだ。

外見とは真逆の、異様なまでに神経質なところがある旦那と一緒に暮らすのは、もう10年以上経つのに、未だに少しだけ緊張する。

お皿の並べ方、洗濯物の干し方・畳み方、洗い物の仕方、、、

結婚当初は、その「こだわり」についていくので精一杯だった。

と、なぜか急にふと昔を懐かしく思い出しながら、今日も朝の家事にとりかかった。

最近眠りが浅い旦那を、娘が起こしに行く。

目に入れても痛くないほど恵菜を可愛がる旦那だが、なんだかここ数日は、

その娘にも、少し冷たい気がする。のは、私の思い違いだろうか??

何をしていても、どうしても、、あの女が野球教室に現れた日のことを思い出してしまう。

颯爽と子供を連れてきたあの女の、旦那を見た瞬間のうろたえた表情と

哀愁とせつなさの入り混じった眼差しを見たとき。

旦那があの人に話しかけたときの、久しく見ていない柔和な表情を見たとき、、、

結婚して以来、毎日毎日、幸せな日も悲しい日も。

どんな時も、怯えていた影が間近に忍び寄るのを感じ、

自分の感情を抑えるのに必死だった。

『代替品』、、、、、、

それが、私に課せられた使命だった。

今までそれを必死に必死に演じてきた。

そして、それが自分自身の幸せだと信じて疑わなかった。

ただ、それさえももう、限界に近づいていた。

『代替品』にはいつか限界が来る。

他の誰でもない私自身が、それを一番良く解っていた。

一番身近にいる家族が、一番遠くにいる人に感じられてしまう現実。
ただ、私はそれを受け入れるしかなかった。

それが、私が背負っていた十字架だからだ。

散々粘ったが、結局息子は野球教室に入れることにした。
あの電話の後、息子に「他にも野球教室があるみたいだし、
他の教室も見に行ってみない？」と聞いてみたが、
頑なに「嫌だ！あそこがいい！」と言い張るので、根負けしてしまったのだ。

旦那にも「本人が気に入ってるんだから、いいじゃないか」と言われ、
娘にまでも「ママ変。『子供だちがやりたいことを伸び伸びとやらせたい』
なんてもっともらしいことをいつも言っているのに」とダメ押しの一言を言われ、
争うのも疲れたので、再度、あの教室に申し込みをするために出向いた。

それにしても、うちの娘はいったい誰に似たのだろうか？
いつの間にか、一端以上の口を聞くようになり、ここ最近は何よりも手強い。
「もっともらしい」なんて、いったいどこで覚えてきたのだろうか？

息子をあの教室に通わせることと同じくらい、
あの男の奥さんに、頭を下げて申し込みをすることが憂鬱だった。
「なんて言われるだろう？なんて思われるだろう？」
息子をだしにして、あの教室に通わせているなんて思われたら、、、。

「悩んでる暇があったら行動しなさい！」なんて、いつも言ってるくせに
あの男のことになると、とことんダメな私になってしまう。
まるで、女子高生だったあの頃のように。

蓋を開けてみると、想像していたよりずっと、奥さんは普通の態度で申込手続きをしてくれた。
もしかしたら、あの体育館での態度や電話での冷たさも、すべて私の被害妄想からくる
思い過ごしだったのかもしれない。

それからというものの、毎週月曜と金曜の野球教室の送り迎えは
いつもの倍以上の時間をかけて支度をした。
クローゼットから服を取り出して、鏡の前で当ててみては
「何かイメージと違う、、、」と元に戻し、そんな自分にほとんど呆れていた。

教室に入ってわかったことが、毎回奥さんが野球教室に来ているわけではないらしい。

ということだった。この間のように体験入学や、何か雑用があるときにだけやってくる。

なので、送り迎えをする私が奥さんと遭遇する確率は、割と低く、
そのことが、少しだけ、野球教室に向かう私の足取りを、軽くさせた。

いや、「そのこと」ではなく、送り迎えをすれば、一瞬だけでも、彼の姿が見れることが
私の足取りを軽くしていたのだ、、、。

そんなこと、体験教室で久しぶりに彼を一目みたときからわかっていた。
私はずっと、彼のことを憎んでいるのと同じくらい、好きだということに。
そして、それを必死に隠そうとするのは、暴走しそうになる自分の気持ちを抑えつけるのと、
、、

旦那への背信を生涯をかけて償うために、自らに科した罰だったからだ。

ママ友達とおしゃべりのときに、ときたま困ることがある。

「恵菜ちゃんママは、ご主人と付き合うことになったきっかけって何なの？」

そもそも、「恵菜ちゃんママ」という呼び方自体、私は大嫌いだ。

私にだってれっきとした名前があるし、呼ばれるたびに

途端に自分の価値が、目減りしたような、悔しい気持ちに駆られる。

ただ、そんなことをママ友達に話してしまったら、あっという間に仲間外れにされる危険さえある。

私だけならいいが、恵菜のためにも、辛抱しなくてはならない。

旦那との馴れ初めを周囲のママ友達が聞きたがるのも、無理はなかった。

旦那はかつては、プロ野球選手だった。

スター選手では決してなかったが、チームにとって欠かすことのできない
玄人好みの野球をする選手だった。

私は、旦那が野球をする姿を見るのが何よりも大好きだった。

緊迫した場面でマウンドにあがるとき、

チームが勝ったときに少し照れくさそうに嬉しそうな顔をするとき、

打たれて負けてしまったときの、いらだちを隠そうと、冷静を装っているとき。

どの一瞬も見逃すまいと、シーズン中は一度たりとも、

旦那の試合がある日は予定をいれたことがなかった。

ずっと家で、テレビにかじりつきながら、ご飯の支度をして帰りを待っていた。

しかし、そんな日々も、結婚してから10年で終わりを告げた。

監督が代わり、チームの若返りの方針に沿って、旦那は非道にもクビを言い渡された。

旦那は人が変わったように荒れた。

今までまっすぐ家に帰って来ていた人が、

夜帰らなくなり、朝から晩までお酒を飲むことさえあった。

「体に悪いから」と今まで一度も口にしなかったジャンクフードを
自分への苛立ちをぶつけるかのように、食べていた。

旦那から野球をとりあげたら、何も残らないかもしれない
と不安に思っていた気持ちが、皮肉にも的中してしまった。
私はどうしていいかわからず、一人になると、ただただ泣いていた。

そんな矢先私の妊娠が発覚し、さすがにしっかりしないといけないという義務感からか、
旦那は少しずつ、落ち着きを取り戻していった。
テレビや新聞で「野球」の文字を目にしても、目に見えて荒れるようなことは少なくなってい
った。

ただ、旦那は私に隠れて浮気をしていた。

いや、正確に言えば私はずっと旦那に浮気をされている。
それは、結婚することが決まったときから、すでに始まっていた。

休日の朝に息子が俺を起こしに来なくなって、どのくらいたつだろうか？

特に最近は始めたばかりの野球教室に夢中で、試合のある休みの日は妻がご飯の支度をし終わるまえに、家を飛び出そうとする。

親にとって、子供の成長は嬉しい反面、巣立っていく淋しさも感じ、

「親なんて、勝手なものだな」とつぶやきながら、ひとりでベッドから起き上がる。

「おはよう、もうお味噌汁温めていい？」という妻の挨拶に迎えられ、食卓につく。

「今日もおにぎりだけもって、野球に出かけちゃったわよ」と半分ひとり言のように、少し溜息混じりに妻が教えてくれた。

俺は正直、そこまで野球が好きなのではないが、

テレビでやっていれば見るし、甲子園なんかは、里帰りする夏休みの大きな楽しみだ。

それにしても、、、妻の野球への強烈なまでの嫌悪感は、いったいどこから来るのだろう。せわしく家事をしている横顔を見ながら、ふと考えた。

今や野球に恋してしまっている息子の手前、最近でこそ露骨な反応はしなくなったが、思い返せばまだ結婚前、一度「プロ野球のチケットが手に入ったから」と試合に誘ったら、ものすごい形相で「行かない」と断られた。

妻と出会ったのは大学を卒業する直前だった。

共通の友達が開催した飲み会で出会い、

特に大きな紆余曲折もなく、

平凡な付き合いをし、平凡な結婚をして、平凡な家庭を築いて、今に至る。

昔から「安定」という言葉が一番好きな俺にしてみれば

今の生活は若いころから思い描いていた「家庭」や「人生」そのものであった。

2人の可愛い子供と、外面の良さや少しキツすぎる性格を除けば、文句のつけようがない妻。

仕事が終わればまっすぐに帰りたくなる家。

それらは、永遠に続くものだと思っていて疑わなかった。

あの日、今まで見たことのない妻の横顔を捉えてしまうまでは。

私の心配が的中したかのように、息子は日に日に野球にのめり込んでいった。野球教室のある日は、一目散に帰宅してユニホームに着替え、ない日には近所の公園で友達と練習をし、家に帰っても庭で一人、練習をしていた。

赤ちゃんのころは真っ白で透き通るような肌だったのに、今や異様に白目が目立つ、真っ黒に日焼けした野球小僧になっていた。そして、息子の野球に対する純粹さが、見ていて少し辛かった。

そう、何よりも野球が大好きだったあの男と、自分の息子とを重ねて見てしまう自分がいた。口を開けば野球の話をし、デートをしているときでさえ急に考え込んで無口になってしまうあの男との懐かしくて、せつなくて、つらくて、、、でも最高に幸せだった日々を、息子を通して見てしまう自分に気がついてしまった。

あの男と出会った夏、私は高校生だった。彼は近くの高校の野球部のエースで、歴代の先輩たちがどうしても越えられなかった県予選の決勝の壁を突破し、チームを念願の初の甲子園に導いた。私の通う学校にさえ熱烈なファンがいて、あの夏は彼にとって人生の絶頂だっただろう。

私と彼が出会ったのは、よく聞く、どこにでもあるようなきっかけだった。女子高に通っていた私の文化祭に、彼が遊びに来たのだ。持ち回りでクラスの展示の受付をしていた私に、彼の友達が声をかけてきた。

「俺の友達が、電話番号教えてほしいって」と彼を指さして言った。あの頃は今みたいに携帯なんてなかったし、もちろんメールアドレスなんて誰ももっていなかった。今思えばあの頃の「連絡先を教えてほしい」は、今よりも勇気が必要で意味を持つ言葉だったような気がする。

指の差す方向を見た私が見たのは、「いかにも体育会系」な、真っ黒で背の高い、がっしりとした彼の姿だった。

「まったくタイプじゃない、、、」
と思わず小さく口に出してしまったくらい、私のタイプではなかった。

知的で、勉強が出来て、すらっとした色の白い人がタイプだった私は、あまりのギャップに、思わず笑ってしまった。

「んー」と、返事に困っていると、彼の友達が
「減るもんじゃないし、教えてくれよー。あいつうちの野球部のエースでさ、将来大物になるかもしれないぜ！」
まだ甲子園に出る前のことで、彼のことなんて少しも知らなかった。

女の子に声をかけるのさえ友達に頼むような男が、
大物なんかになれるわけじゃない、、、と思いながら
友達の押しの強さに負けて、家の電話番号を回収済のチケットの裏に書いて渡した。

少し遠目からそれを見守っていた彼が、チケットをを少し照れくさそうな顔で受取り
「名前は？」と大きな声で聞いてきた。

「理沙」とぶっきらぼうに答えると、彼は近づきながら
「りさ、ね。電話するからちゃんと出てな」
外見から想像していたのとはまったく違う、穏やかで低い声で言われた。

「うん、家にいればね」とそっけなく答え、たいして忙しくもない受付の仕事に精を出すふりをし、
彼が「じゃあ、また」と去っていくのを、気がつかれないように、ずっと横目で追っていた。

この時既に、私は彼を好きになっていたのだろう。

文化祭の後に家に帰った日から、
最初に彼からの電話が鳴るまでの時間がとても長く感じられたのを
昨日のこのように思い出すことがある。

そして今でも、、、、心のどこかで、私は彼からの電話を待っている。

旦那と私の出会いは、私がまだ社会人になりたての頃だった。

可愛がってもらっていた先輩に、「人数合わせでどうしても来てほしいの！」とお願いされ嫌々参加した合コンがきっかけだった。

そのとき私には既に、長年付き合っている彼氏がいて、

ちょうどその合コンの前の週に、両家の顔合わせを行ったばかりだった。

週末は式場巡りや、新居探しに奔走していて、でもそんな時間がとても幸せだった。

恵比寿にある、いかにも「合コン慣れ」していそうな男が選びそうな

ちょっと洒落た個室、が何部屋も並ぶお店に、開始時間より少し遅れて到着した。

「1次会で切り上げて、翌日に備えよう」とつぶやきながら、部屋に入ったところ

予想以上に部屋の中は既にかかなり盛り上がっていて、私を誘ってくれた先輩もかなり楽しそうだった。

「麻耶ちゃん、こっちこっち！」と呼ばれ、目の前の席に座っていたのが旦那だった。

なんだか、愛想のないすかした奴、、、というのが第一印象。

お決まりの自己紹介タイム、の時にいつもだったら会社名を言う男性陣が、会社名を言わないので思わず先輩に

「え、社会人ですよね？」と聞いてしまった。

すると、「麻耶ちゃん、知らないの？プロ野球選手だから！彼ら」と呆れ気味に小さい声で言われ、

初めて、なんで今日の合コンに先輩があんなに気合いを入れていたか知り、思わず苦笑してしまった。

そう、彼らはみんなプロ野球選手で、そこそこ有名どころだというのだ。

野球に全く興味がない私は、誰一人知らず、よもや旦那のことなんてこれっぽちも知らなかった。

しかも、プロ野球選手なんていかにも遊んでいそうで、全くタイプじゃない。

はしゃぐ他の女子を尻目に、おもむろにタバコを口にくわえて火をつけた。

「普通女の子って合コンでタバコとか吸わないんじゃないの？」

目を上げると彼が笑いながら言っていた。余計なお世話だ、とムっとしながらも

「や、自分を押し殺してまで好かれなくてもいいんです。私」と愛想笑いをした。

いつもだったらここで、私の心のシャッターは完全に下りているところだ。

しかし、「おもしろい奴」とつぶやいた彼になぜか興味をもち、そこから1時間以上二人で話続けた。初対面だったのに不思議と波長が合い、何を話していても楽しかった。

ずっと関東育ちの私には、彼の関西弁が新鮮だけど心地よく、いつの間にか引き込まれていった。

強烈な自己主張をするわけでもなく、淡々と話す彼は、私が抱いていた「ガツガツした」イメージの野球選手のそれとはまったく違った。

気がついたら1次会のお開きの時間になり、「次どうするん？」と聞いてきた彼に、勇気を出して「二人で飲み直さない？」と応えた時、既に自分が強烈に彼に惹かれていることを自覚した。

カバンの中では、遅くなりそうな私を心配した彼氏からのメッセージを知らせる振動が、夜の街の喧噪にかき消されていった。

彼から初めての電話がかかってきたあの日のことを、今でも鮮明に覚えている。
母が「聞いたことのない名前の男の子から電話よ、理沙ちゃん」と部屋に呼びに来た時には
思わず受話器を母の手からひったくっていた。

「もしもし、、、？」という一言を口にするのさえ緊張していたのだ。
ただ、受話器の向こうの彼も同じくらい緊張していて、一時間も電話をしていたのに、
会話の内容は、あってないようなものだった。

それからというものの、放課後のお遊びもほどほどに、塾帰りの寄り道もやめ、
今まで散々時間をかけてきたお風呂でさえ、母が呆れかえるくらいすぐに出てくるようになった。
それこれもすべて、彼からの電話を逃したくないという一心で。

振り返ってみても、なぜ彼にあんなに惹かれたのか、うまく思い出すことが出来ない。
彼の持っている強烈な存在感だったのか、自信に溢れた態度だったのか
自分を好いてくれていると感じたからなのか、、、

中学生の頃にも、何人か「好きだ」と言ってくれた男の子はいたけれど、結局付き合うことは
なかった。
昔からどこか冷めていて「子供らしくない」と言われていた私は、彼らに全く魅力を感じなかつ
たのだ。
好きなタイプは？と聞かれたら「年上の大人の男」と答え、どこか見下した態度で彼らに接して
しまう。
今思えばなんて生意気な女の子だったことか。

何回かの電話を経て、「今度、部活の帰り待っててもらっていい？」と
初めてのデート（と呼べるのだろうか）の誘いをうけた。
考えてみれば、デートらしいデートなどしたことがなかった私は、
2日後に迫ったその日を迎えるのに、それはそれは大層頭を悩ませながら準備をした。

髪の毛はおろしたほうがいいのか、アップにしたほうがいいのか。
お化粧はしたほうがいいのか、ナチュラルなほうがいいのか。
制服のスカートの丈は？どんな靴下をはけば？

悩みすぎて頭がパンクしそうだったけれど、なんだかとても幸せだった。
短くなったはずのお風呂の時間は前よりさらに長くなり、
弟に風呂場のドアを、壊れそうなほど叩かれた。

「理沙、頑張っ！」
見送ってくれる友達のほうを何度も振り返りながら、
不安と期待が入り混じった気持で、彼の高校へ向かった。

梅雨が明ける間近の、雨の匂いと夏の日差しが少し入り混じったような、あの独特の空気の中を
歩いて、
彼から待ち合わせ場所に指定された裏門の前のベンチに腰を下ろし、少し目を細め、夕日に照ら
されたグラウンドを眺めていた。

ちょうど野球部の練習が終わったばかりで、あちこちで下級生がボール拾いや
道具の片づけをしていた。その少し遠くのほうで、急いでこちらに向かう彼の姿を見つけた。
「待たせた？ごめん」という一言が、少しこそばゆくて、下を向いて「ううん」と一言つぶやく
ので精一杯。

梅雨が明け、蝉が元気よく鳴きはじめた頃の「俺と付き合っ欲しい」という一言に
力強く頷き、二人の長い長い夏が始まった。

恵比寿での一晩があまりにも印象的だったからか、週が明けて仕事が始まってからも私はどこか上の空だった。

「麻耶ちゃん、あの後来ればよかったのに～！めちゃくちゃ盛り上がったよ。カラオケ」隣の席で満足気に話す先輩の話に適当に相槌を打ちながら、あの夜のことをまた、思い返していた。

みんながカラオケに向かうのを見届け、駅へ向かう体で二人で歩を進め、角を曲がったところでタクシーに乗り込み、銀座へ向かった。今まで誰も連れて行ったことのない、一人になりたいときに行くバーの前で車を止めた。

バーの入っているビルを見上げ「なんかめっちゃオシャレですね。俺、ちょっと緊張するわ～」彼の素直な反応がまた可愛くて、思わず手をひっぱってエレベーターまで導いた。お店の中は金曜日ということもあり、カウンターも少し動くと隣の人と肩が触合うような距離だった。

いつも一人で来る私が他の人を連れていることに驚いたマスターも、大好きなマティーニを造ってくれるバーテンダーも、一様に、私にだけわかるように眉毛を少し吊り上げて、それから何事もなかったかのように微笑んだ。

「いつもこんなところに来るんですか？でもなんか納得。大人やな～」微妙に敬語とタメ口が入り混じる彼の話し方が妙に落ち着き、思わず何でもしゃべってしまう。「今まで誰もここに連れてきたことないの。私の隠れ家」

少し嬉しそうに笑った彼の顔を見て、なんだか無性に申し訳なくなった。私には婚約者もいるし、、、、。でも、この彼だって本気かどうかなんてわからない。年上の女性と飲んでみたいと思っただけかもしれないし、きつとこんな風に見えて実際は遊び人なんだ。

彼にどう思われているかが気になってしょうがない自分の気持ちを、なんとか必死に抑え込もうとした。

「彼女とかいないの？野球選手ってモテるんでしょ。」
「んー、居ると言えばいるし、居ないとはいえいいひんかなー」

「どうということ？なんかハッキリしないんだけど」

「何でも話さなくちゃいけない？」

ついさっきまでとは打って変わって凍りついた表情で言葉少なに言われ、思わず萎縮してしまった。

結婚してだいぶたった今でも、未だに旦那は私には心を開いていない。

この時に見てしまった「人に感情を悟らせない表情」をするとき、私はいつも絶望的な気持ちになる。

もし初めて出会ったあの日、彼の後を追うようにあのバーを飛び出さなければ、全く違う未来が私を待っていたであろう。

-----「俺もう一生、好きな人作らないって決めてるんです」-----

私はどんなに頑張っても、彼の一番にはなれないことなんて最初からわかっていた。

それでもなぜか彼と結婚したいと思ったのは、自分の平凡でありふれた人生に蹴りをつけたかったなのか。

今まで寸分の狂いもなく進行していた人生が、ここからガタガタと崩れ始めた。

彼の人生の絶頂の夏が、私の生活にも大きな影響を与えていた。

歴代のチームが勝てなかった県の競合を次々と撃破し、連日地元は大盛り上がりだった。

「これはもしかしたら、本当に甲子園に行けちゃうかもしれないなあ」

私の父親も、会社で皆でラジオをつけて応援しているんだ、なんて、とても嬉しそうに夕食のときに話していた。

まだ母親にも、勿論父親にも彼と付き合っていることは内緒にしていた。

隠している、というより今まで男の子とつき合ったことなんてなかったので、どんな顔をして言ったらいいのかもわからなかった。

試合のたびに、より焼けて帰ってくる私を見て、母親に

「理沙ちゃん、あんなに日焼けするの嫌いだったのに。野球の応援なんてどうしたの？」と、最初は不思議そうな口調で聞かれた。

野球を全く知らなかった私に、彼の野球部の先輩が試合のたびに丁寧にルールを教えてくれたおかげで、

随分と詳しくなったものだ。

ただ、彼が投げている時にはゲームどころではなく、いつも彼の立っている、その一点を見つめて祈るような気持ちで見ている。

「どうか彼が甲子園に行けますように」

今まで、生活のほとんどを野球に賭けてきた彼や彼の仲間が甲子園の舞台に立つのを見てみたかった。

彼と話をしていると、いかに今まで努力して、いろんなことを犠牲にして野球をしてきたかがよくわかる。

練習の合間をぬってのほんの僅かな時間、10分だけでも会いたいがために、彼が練習が終わるまで、あのいつものベンチで待った。

県予選の決勝の前夜、駅までの帰り道の途中で彼が言った。

「明日、絶対勝って理沙のこと甲子園に連れてってやるし、信じて待ってて」と。

嬉しくて、ちょっと泣きそうになるのを堪えて「うん。頑張ってるね」というので精一杯だった。

別れ際、いつもなら割とあっさり別れる彼が、

「明日頑張るし、チューして（笑）」と冗談半分に照れながら言う彼が可愛くて、
つい「明日勝ったらね！」とほっぺにチューだけして、大手をふって別れた。

その人がいるというだけで、何かに懸命になれることなんて、

遠い昔にどこかに忘れてきてしまったような気がしていたけれど、

あの頃の私たちの青臭いけど一生懸命だった日々は、今でも私にとって、何よりも大事な日々だった。

「理沙、お前時間間違えてる？ 迎えの時間まだ1時間先、、、オカンになっても相変わらずやなあ」

ふと顔をあげると、車の窓をたたく彼が少し意地悪そうな顔で笑っていた。

「コーチがあいつら連れて長距離のランニング行ったし、その辺で待っとくか？」

少し錆びているベンチに二人で座って前を向いていると、

なんだか急にあの頃に戻った気がした。

ふと、彼のほうを見ると、グラウンドのほうを向いて

「なあ、あの頃にもう一回戻りたいと思うか？ 戻れたら、俺はもう絶対にあんなことしない、、、

なんて、いまさら言ってもしゃあないな」

そして急に腰をあげて、またいつもの彼の表情で「ごめんごめん！ 変な話して。缶コーヒーおごるし今のなかったことにして」

意味もなく頷いて、彼が小走りするのを後ろから見つめながら、私はあの日のことを思い出していた。

「私だってやり直せるんだったら、あなたとやり直したい、、、」

決して口には出せない一言を、自分の心の中でつぶやいた。

彼と出会ってから、私の生活は一変してしまった。

何よりも大事だったはずの仕事が後手に回り、進めなければいけない、結婚式の準備にも全く身が入らなかった。

私の様子がおかしいことに一番最初に気が付いたのが、いまや婚約者になっていた、彼氏だった。

「なんか最近麻耶様子おかしくない？何か気になることでもあるの？」

と聞かれても、本当のことなど答えられるはずもない。

しかも、まだ決定的な何かがあったわけでも、約束があるわけでもなかった。

そんな不安定な状態なのに、私の心はすっかり彼に傾いてしまっていた。

仕事を早く切り上げて、彼の家までご飯を作りに行ったり、

会社を休んで試合を観に行ったり、

「時間ある？」と聞かれれば、いつ何時でもタクシーを飛ばしたり。

彼には全てのものに優先順位があった。

1に野球。

2に家族。

3に仲間。

彼は多くを語らなかったが、家族からも早く結婚するようにせっつかれているみたいで、恋愛云々というより、「結婚」に対して焦りがあったみたいだ。

彼の機嫌がいいときには「麻耶さん、結婚しようか～」

なんて、急に甘えてきたりもするのだが、

一転して機嫌が悪くなると、口も聞いてくれない。

こんな風に振り回されるのは御免だと思いながらも

私はどんどん深みに嵌っていき、ついには婚約者に告白せざるを得なくなった。

「ごめんなさい。好きな人が出来てしまったから、結婚できない、、、、」

最後の言葉を振り絞るのに精一杯だったが、言い終えた後には

もう後戻りできない、という気持ちと、これでやっと苦しい状態から解放される。

という安堵感が少しあったのも事実だ。

婚約者の彼は、何も言わずに私が話すのを聞いていた。
今までたくさんの思い出と一緒に作って、これから結婚して
暖かい家庭を築いて、子供が産まれて、、、

彼となら、全部うまくいくのは間違いがなかった。
ワガママな私を受け入れてくれて、
家族とも本当に仲良くしてくれて、
申し分のない相手だった。

なのに、、、私には、自分の気持ちを誤魔化すことが出来なくなっていた。
小さな、まだ芽生えたばかりのはずの恋心なんて内に秘めておけばいいものを、、、
けれど、それが出来なかった。

最後に別れる時、
「いつでもまた、俺と結婚したくなったら連絡してきて！空いてたら結婚してあげるし。」
一生懸命、笑い話にしてくれようとする彼の心遣いに、どうしようもなく申し訳なくなり、
ただただ泣くことしか出来なかった。
この時に手離れた手を、もう二度とつかむことができないのは覚悟していた。

ただ、まさかこの日の夜に彼が事故に逢い、病院に搬送されたと連絡がくることなど、夢にも思
っていなかった。

病室につき扉をあけると、彼の両親と私の両親が揃って私のほうを向いた。

「麻耶、そこに座りなさい」
いつもは優しい父の言葉が、矢のように私に突き刺さった。

約束通り、翌日の決勝戦を見事ものにした彼は、瞬く間にヒーローになり、私は「ヒーローの彼女」になってしまった。

優勝後の地元新聞のインタビューで彼が「今まで育ててくれた両親、一緒に頑張ってきた仲間、お世話になった周りの方々、そして、彼女にありがとう、と伝えたいです」なんて言ったものだから、

その新聞を見た友達からの電話が鳴りやまなかった。

結果的のこの新聞記事で、両親にも付き合っていることがバレ、隠していたことを少し怒られたものの

野球が大好きな父親は、まだ会ったことさえないのに息子が出来たかのようなはしゃぎようでなんだか少しほほえましかった。

「理沙ちゃん、あんな彼氏いて羨ましい〜」と、塾の友達京子に言われた。

塾の女の子たちに後ろ指を指されることが増えた中で、京子は唯一心を許せる友達だった。

いつも無邪気で天真爛漫な彼女とは夏期講習を抜け出して、彼の応援に付き合ってもらったり彼と夜に少しだけ会うときも、アリバイ作りをして、母親に電話してくれたりもした。

甲子園に向けて出発する前日の夜、こっそり宿舎を抜け出してきた彼と合宿所裏の雨樋の下で会った。

「今まで口に出しても、笑われるかもしれないと思って誰にも言わなかったけれど、今回の甲子園で活躍して、必ずプロ野球選手になる。

誰にも文句がつけられないくらいの活躍をして、絶対になってみせる。

だから、これから俺と付き合ってた嫌なことたくさんあると思うけど、信じて欲しいし、悲しませるようなことは絶対にしないから、ついてきてほしい。」

いつも私の前ではおちゃらけている彼の、真剣な表情と努力の塊の象徴のゴツゴツとした右手を両手でつつみこんで「うん。わかった」と短く言った。死ぬほど嬉しかったけれど、そんな覚悟が自分にあるのか、自信がなかった。

「そういえば、俺がなんでお前に声掛けようと思ったか、知ってる？」

「いや、知らない。なんで？」

「んーやっぱ秘密。甲子園から帰ってきたら教えてやる。」

「最後まで帰って来ないでね。試合の日、出来るだけ見に行くようにするし」

「受験勉強もあるんやから、無理すんなよ。でも待ってるわ。」

「怪我しないでね。しっかりご飯食べてね。ちゃんと寝てね。」

「オカンか！安心して試合観に来い。じゃーいってきます！」

-----「うん。行ってらっしゃい。気を付けてね」

私は毎朝彼をこのセリフで見送る日を、いったいどれだけ夢見ただろうか。

(続く)